

「永遠の命」

(ヨハネによる福音書 10:22-30)

「神殿奉献記念祭」は「ハヌカの祭り」と言われ、ユダヤ教では現在も毎年 12 月に大切に守られているお祭りです。元々の起源は紀元前 6 世紀にバビロン捕囚から帰還したユダヤ人が神殿を再建したことにあります。しかし、後に神殿は再び異邦人支配者によって汚され、神殿にはゼウス像や異教の祭壇が築かれました。そこからユダヤ人を救ったのがユダ・マカバイオスです。彼はエルサレムを奪還すると、主なる神に犠牲をささげる祭壇をつくり直し、神殿の汚れを清めました。当時はまだローマ帝国にも支配されておらず、ユダヤ人は一時的に自分たちの王国を作ることにも出来ました。それが紀元前 164 年 12 月 14 日。ユダヤ人たちは、このことを記念して神殿奉献記念祭を守るようになりました。

極めて政治的、民族的な色彩の濃い祭りの最中です。人々の民族解放への願いは強くなっていたことでしょう。人々が、メシアだと噂される主イエスに期待したのは、ユダ・マカバイオスのようなローマの支配から自分たちを解放してくれる存在でした。「いつまで、わたしたちに気をもませるのか。」というセリフに、この思いが表れています。しかし、神殿奉献記念祭にあつて、主イエスが示したのは、神殿に頼らず、過去の英雄や民族の誇りに頼らず、人間の栄枯盛衰に右往左往するのではない、「永遠の命」への招きでした。「わたしは彼らに永遠の命を与える。」と言われる主イエスは、「永遠の命」へと人々を招くためにこの世に来られたのです。

永遠の命とは、物理的に永遠に生きる、というよりも、永遠である神と共にある命を意味します。主イエスは「わたしの父がわたしにくださったものは、すべてのものより偉大であり、だれも父の手から奪うことができない。」と言われます。すべてのものよりも、わたしたち一人ひとりの命が偉大だと、大事だと言われるのです。神と共にある永遠の命に与るということは、一人ひとりの命が神によってどこまでも大切にされ、互いの命を尊び合う生き方に迎えられることです。それは、人間同士で殺し合い、土地を奪い合う生き方とはまったく異なります。

「わたしと父とは一つである」と言われる主イエスは、神と御子との愛の交わりに人を招きこむことで、永遠の命をわたしたちに与えてくださいます。主イエスと父なる神とがガッチリと守ってくださるからこそ、この世がどのような状況でも、信じるものの命は虚しく終わることは絶対にありません。